

火の神の恩返し

梗概 源河に、源河ハイカーといって急流があった。源河の人でね、ジュリを呼んで遊ぶ人がいらっしやったそう。そうして、この火玉が、美しい女に化けて、自分は火玉だけど、水の上は、恐がって渡ることができなくて。源河エーキという人が、もう、ジュリと遊んで、家に帰ろうとする時、（この火玉を）おぶって渡ろうとすると、背中が燃える様に、大変熱かったらしいよ。「ああ、不思議なことだなあ。」と思っていた。そして渡ってから降してやると、この女が、この源河エーキの主人に、「私は、何日の何時に、源河村の源河エーキの家を焼いてきなさいといいわたされています。」といってね。もう自分は恩があるでしょう。女は、また教えてね、損をさせないようにという考えでね、それで、「自分の家の前に、簡単に茅で家を作りなさい。」とおしえてね。そして、刈り取りした藁もね、一本、一本ずつつないで火の神の前からね、番屋に。もうこうして、その番屋へと糸を引いて、それから火は渡っていったらしい、チュル、チュルといって。ちょうど、ダイナマイトの導火線と同じように、そうして、番屋はいきおいよく燃えてね。それで、「源河エーキの家を焼いてきました。」と報告して助かったらしい。ジュリを呼んで遊んでばかりいる悪者だけど、こうして助けて恩があったわけさ。もう正直者でいらっしやったんでしょうね。

①源河ハイカー……名護市の字、源河の中央を流れる川。

②ジュリ……那覇の遊郭の遊女のこと。

話者情報 1910（明治 43）年生まれ 男性

記録日 1983 年 3 月 25 日

分類 本格昔話